



原油が反落 米景気懸念で 金も反落

13日のニューヨーク・マーカンタイル取引所（NYMEX）で原油先物相場は4営業日ぶりに反落した。WTI（ウエスト・テキサス・インターミディエート）で期近の10月物は前日比0.47ドル（0.5%）安の1バレル87.31ドルで取引を終えた。13日発表の8月の米消費者物価指数（CPI）が市場予想を上回る上昇となった。米連邦準備理事会（FRB）の利上げ加速で米景気が冷え込み、原油需要が伸び悩むとの懸念が広がった。

CPIは前年同月比8.3%上昇と7月（8.5%）からは減速したが、市場予想（8.0%）を上回った。20～21日の米連邦公開市場委員会（FOMC）で通常の4倍の1.0%の利上げが決まるとの見方も一部で浮上し、大幅な利上げが米景気を冷やすとの警戒感が高まった。

CPIを受け、13日の米株式市場でダウ工業株30種平均が急落した。投資家が運用リスクを避ける動きを強め、株と同様にリスク資産とされる原油先物の売りを促した面もあった。

ニューヨーク金先物相場は3営業日ぶりに反落した。ニューヨーク商品取引所（COMEX）で取引の中心である12月物は前日比23.2ドル（1.3%）安の1トロイオンス1717.4ドルで取引を終えた。13日の米長期金利が上昇し、金利の付かない資産である金の先物の投資妙味が薄れるとみた売りが出た。



米8月物価8.3%上昇 市場予測上回る伸び率

米労働省が13日発表した8月の消費者物価指数（CPI）は前年同月比8.3%上昇だった。原油高騰が一服し、伸び率は前月の8.5%を下回った。伸び率が前月を下回るのは2カ月連続。市場予測は8.1%上昇だった。米国のインフレはピークを越えた可能性があるが、依然として記録的な高水準が続いている。

8月のエネルギー価格は23.8%上昇で前月の32.9%上昇を下回った。ガソリン価格も25.6%上昇で伸び率は前月の44.0%から鈍化している。一方、食料品は11.4%上昇で前月の10.9%上昇を上回った。変動の大きなエネルギーと食料品を除くコア指数は6.3%上昇で、伸び率は7月の5.9%から加速した。米連邦準備制度理事会（FRB）の目標である2%を大きく上回る水準だ。

FRBはインフレ抑制を最優先課題に掲げ、金融引き締めを急いでいる。6、7月の会合では従来の3倍となる0.75%の政策金利の引き上げを決定。9月20、21日の会合でも同じ幅の利上げに踏み切るとの見方が多い。



原油市場安定化へ連携 日・UAE首脳電話協議

岸田文雄首相は13日、アラブ首長国連邦（UAE）のムハンマド大統領と電話で協議し、国際原油市場の安定化のため連携を確認した。脱炭素社会実現に向けた気候変動対策の推進でも一致した。首相はUAEによる日本への原油の安定供給に対し、謝意を表明した。

会談は約20分間。両国は2023年から共に国連安全保障理事会の非常任理事国を務めることから、緊密に協力していくことも申し合わせた。

